

試練をも喜んで

「ヤコブの手紙」1章1～4節までを朗読。

2節「わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい」。

新年を迎えると、毎年の事ですが、なんとかこの一年も幸いな生涯でありたいと願います。日本では、新年に神社仏閣に祈願に行きます。その目的は、この一年、家内安全、無事息災、何ごとも事無く、過ごしていきたい、自分の願い希望がかなえられるようにと、期待を込めて、そういった所に出掛けて祈願します。それは誰にでも共通する願いであります。しかし、人は生きている限り、悩み、苦しみ、悲しみという患難、これから逃れることができないものです。だからこそ、何かにはすがって、少しでも軽く済ましてしまう。あるいは、何とかそれを逃れる道はないかと、多くの人の願う所であります。

しかし、考えてみると、この年に至るまで患難がなかった年はありません。昨年一年を振り返ってみても、あの事、この事、健康の問題、経済的な問題、家族の問題、次から次へと、これほどあるかと思う位、出てきます。その度に、ハラハラドキドキ、あっちに走り、こっちに走り、右往左往して、過ごしてきたわけです。今年こそはできる限り、少しでも、苦しいことがないように、悲しいこ

とに遭わないように、何とか守って下さいと願います。しかし、それが無くなることはまずありません。多くの人々は患難がないことが幸せだと思っていますが、聖書を読みますと、患難や苦しきはきれいさっぱりなくなると約束されたことではありません。

神様はなぜそういうことをなさるのか。神様はすべてのものを創造された方です。聖書の一番初めの創世記に、「はじめに神は天と地とを創造された」(1:1)と語られています。天も、地も、その中にある一切のものは、神様が創造なさった。そして神様は私たちを造り、この地上に命を与え、生きる者として下さった。私たちは神様の事を知らないで過ごしてきたことが多かったのですが、神様は私たちを知らなかったわけではない。それどころか、この地上に生きよと命を与えられた神様は、いろいろな事を備えて下さいました。私たちが受ける事態や事柄、日々の出来事、どんな小さな事も大きな事も、実はこの神様によらないものはないのです。ところが、神様を見ることができない、知ることができませんから、何かの祟りであるとか、自分の行いが悪かったからとか、先祖が何か悪さをしたから、こんな目にあっているのだと、いろいろな事を思って、その原因を探ろうと致します。しかし、聖書には、すべてのことは神様から出たことであると語っています。イザヤ書を開きましょう。

「イザヤ書」45章5～7節を朗読。

5節以下に、繰り返して、「わたしは主である」と語っています。「主である」というのは、すべてのものの根源であり、始まりであり、またそれを統べ治め給うお方。この方は、「わたしこそ神である」とおっしゃいます。私たちはこの神様によって造られたものです。そして神様のみこころに従って、この地上に命を与えられたのです。しかし長くそのことを知らないままに、ただ人の力、人のわざで生きてきた私たちに、いろいろな出来事を通して、神様はあわれんで、私たちを神様のみもとへ引き戻して下さった。これが今受けている救です。神様は私たちにいろいろな機会を与えて、きっかけを与え、わざをなして、「わたしに帰れ」「主に帰れ」と、私たちを呼び寄せて下さいました。それで、今、創造者であるお方を知る者とされました。

ところが、なお私たちは、すべてのことが神様から出たものであると、頭ではわかっていますが、実際的な事柄になりますと、つい人を見たり、見えるものに目を囚われます。あの人がこうしたから、この人がこうしたから、自分の能力が足りないから、自分の努力が不足しているから、こうなった、ああなったと、すべての事の因果関係を、神様抜きで考えてしまうのです。その結果、あの人がいけない、この人がいけない、こういう事情だからと、自分のおかれた境遇や氏素性、いろいろな事を感謝できない、喜べない、受け入れられないで、悶々と日を過ごし

てしまいます。

それに対して、神様がおっしゃるのは、「わたしは主である」。あなたの人生を造り、生かしている中心は何か。これは神様、私なのだと。しかも、神様は、7節に言われるように、「光をつくり、また暗きを創造し、繁栄をつくり、またわざわいを創造する」。神様は光を与え、また繁栄を与えて下さる。恵み豊かなお方であり、同時に、また暗きを創造し、わざわいを造る。だからいいことも悪いことも、自分にとって、よかったことも、悪かったことも、それは人の判断です。各自がそう評価しているだけのことです。神様は悪さをしようとか、こいつをいじめてやろうとか、そういう悪意か企みがあって、事をしておられるのではなくて、神様はすべてをご自身のみこころに従って、繁栄を造り、暗きを創造し、光を造られるわけです。

だから私たちの受けるどんなことも、これは神様のなさるわざです。どうか、このことをしっかりと心にとめておきたい。あの人がしたから。この人がしたから。私の努力が足りない。もしそう思うのならば、神様をないがしろにしてしまう。それは神様を認めようとしない態度に他なりません。ですから、常に、どんなことも、神様が「事をなすエホバ、事をなして、これを遂ぐる」(エレミヤ33:2、文語)、どんな事も始め給うお方は、それを持ち運び、それを終わらせるお方。結論を出して下さいのも神様です。いろいろな災も繁栄も、光も暗きも、ありと

あらゆるものを、神様は私たちに与えて下さっています。しかし、私たちは身勝手ですから、選り好みをする。これだけあればよい。これはやめてほしい、等々。それは身勝手な、人のわがままな思いでしかありません。どんなことも私たちにあって決して無駄なことではない。意味のないこと、なくてよかったという事態は一つとしてない。神様がよしとして、私たちに必要な事、大切な事として、そのことを起しておられます。

ですから、一つ一つの出来事を起し、導かれるお方が、だれであるか。そこに常に目を留めること。これが私たちに求められていることに他なりません。人生においても、神様は、私たちに必要な事、大切な事、これを受けてほしい、この事を学んでほしいことが必ずあるから、私たちに様々な事を起して下さる。それは自分にとって、不幸と思える事態、あるいは悲しいと思える事態かもしれません。しかし、決してそれで終らない。ですから、「ヘブル人への手紙」を開きたいと思えます。

「ヘブル人への手紙」12章5～7節を朗読。

ここに「訓練として」と、語られています。神様はともすると、私たちの願わない、求めない、喜べない事態の中に置かれます。これは必ずと言っていいと思えます。何故かと言うと、神様はそういう事柄を通して訓練して下さるのです。イエス様の救いにあずかって、神様が私

たちの味方となり、神様は私たちの主となって下さった。だから、これからは、神様が何もかもよきにはからって、私は何の心配もない、悲しみもない、苦しみもないに違いない。救われたら、万事万端、事が順調にいくのだと思いきや、逆になおのこと、次から次へと、思いがけない、いやなことや辛いことが降りかかってくる。これは一体どうしたことかと、そう嘆かれる方がおられますが、神様のみこころは、私たちの願いを実現し、思いを実現しようというのではなくて、私たちが神様の作品として、造り変えて下さるためです。

イエス様の救いにあずかったのは、本来先程も読みましたように、すべてのものの造り主である神様が私たちが造られた。本来、あるべき姿、神と共にあった、はじめの姿から失われたものとなった私たち。神様の尊いかたちを、命を失って、神様の到底、考えの及ばないような者へと墮落してしまった。失われてしまった。罪ととがとに死んだ者となってしまった私たちが、もう一度、そこから救い出して、神様の本来の目的にかなうと言いますか、神様の作品として、最初に造られた人としての姿へと私たちが造り変える。その最終目標は、キリストの姿かたちに私たちが変えられることです。神のかたちにかたどられてと、創世記に語られていますけれども、その神のかたちとは何であるか。それが後のキリストの姿です。キリストの性質に、私たちが造り変えられて行くこと。これが神様が私たちが救いに引き入れ、日々、私たちになして下

さる神様のわざであります。

神様は、何としても私たちをきよめ、造り変えて、神の栄光にふさわしい、神の姿に、新しいキリストの霊にしっかりと一つになっていくこと。私たちの内なるものをきよめて、キリストの姿かたちができるまで、霊なる主の働きによって造り変えようとして下さるのです。その私たちのために、神様が用いなさるのが、私たちにとって辛いことかもしれない試練と言われる事態です。5節に、「わたしの子よ、主の訓練を軽んじてはいけません。主に責められるとき、弱り果ててはならない。主は愛する者を訓練し、受け入れるすべての子を、むち打たれるのである」と。神様は、私たちを愛するゆえに、私たちが滅びの中から救い出して、主イエス・キリストの命をもって贖い、さらに神に受け入れられるにふさわしい、神の子供として、名実ともにしっかりと造り上げる。神のものとして下さるために、この世で命を与えた私たちの日々の生活を通して、一人一人を訓練して下さる。6節に「主は愛する者を訓練し」とあります。私たちを愛して下さるがゆえにです。父なる神様はご自分のひとり子を惜しまないで、私たちのために、イエス様を十字架で命を絶たれた。それだけに、より一層、私たちをなんとしても神様の目指している真の人に、最初に造られた人と同じ、栄光の姿になんとしても変えなければおれないのです。愛すればこそです。神様はどんなものにも代えがたい代価をもって私たちが贖った。それを汚れたままで置いておくわけにはいかない。

大金を払って、犠牲を払って、手に入れたものは、磨き磨いて大切にすることに違いない。私たちは救われた時、本来の姿が無くなって、泥だらけ。ぼろ雑巾のようなものであって、捨てられて当然の状態、これはどうにもしようがない、捨てるしかないというものを、あえてひとり子という尊い命を代価に買われたのです。あなたのために、神様は自分の命を捨てたのです。そういう私たちに、あとは勝手にやってくれとは到底言えません。それどころか、犠牲を払った神様は、何としても、神の子にふさわしく、何としてもきよめ、整え、新しく磨きをかけたいのです。神様の作品として、私たちが立たせたい。これは神様の愛から出た切なる思いです。愛していないのなら、放っておけば済むことです。そうじゃなく、神様はここにいますように、主は私たちを愛するがゆえに訓練して下さる。受け入れるすべての子をむち打たれる。時には、厳しくむち打たれ、痛い思いをする事がある。しかしそれは何としてもそこで教えたいこと、知ってほしいこと、身に着けてほしいことがあるからです。

7節「あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである」。神様は私たちを子供として取り扱うがゆえに、なお一層、厳しくなるに違いない。あるいは、期待が大きくなるに違いない。皆さんでも、自分の子供に対しては結構厳しいと思います。同じことをしても、自分の子供は叱りますが、よその子には言わないでしょう。「かわいいね。乱暴やね、

あなたの子は」と言いながら、笑って済ませます。ところが、自分の子がそんなことをしようものなら、ひどく叱るでしょう。それはこの子にとってよくないことだから。何とかして、そういう行為をやめてほしいと思うに違いない。だから、愛すればこそ、子供を一生懸命に叱ります。最近の親御さんはなかなか叱らないようですが、私たちの子供の頃、親がどんなに厳しくしつけをしたか。箸の上げ下げから、茶碗のもち方、立ち居振る舞いのいろいろなことで厳しく言われました。そういうものは、後になってありがたいと思うのです。

福岡の教会の方で、子供に大変厳しい方がいました。子供が小学生下級の頃、すでにお父さんは家の仕事を次々と言いつけます。ある時、お父さんが庭の掃除をする。「庭の掃除をするぞ」。子供が「はい」と言って、箒と塵取りを持って行った。するとお父さんが「なんだ、これだけか。ちりを集めたら、袋がいるだろうが。そこまでわからんか」と、そういう叱り方をする。これは一つの例であって、事々そうです。「先を読め。次に何をしたらいいのか。掃除すると言ったら、あれと、あれと、これがあることがわかろうが」と言う。お母さんは「主人が厳しくて、ハラハラして、叱られるたびごとに、自分の胸が痛かった」。ところが、今になって、その息子さんたちを見ると、よくできた人だと思えます。右から左から目配りができる、いい人物です。

神様は、そうやって、私たちを「立て

ば這え、這えば歩めの親心」と言いますが、神様は私たちを愛するがゆえに、もっとこうなってほしい、ああなってほしいという切なる愛の思いがあるからです。だから、ここにありますように、「**あなたがたは訓練として耐え忍びなさい。神はあなたがたを、子として取り扱っておられるのである**」。神様は私たちを子供として取り扱うがゆえに、訓練を与える。もし、今年、患難がなかったなら、神様から見放されたのかもしれませんが。神様は愛して下さるがゆえに、いろいろな悩みの中に置かれる。10節「**肉親の父は、しばらくの間、自分の考えに従って訓練を与えるが、たましいの父は、わたしたちの益のため、そのきよさにあずからせるために、そうされるのである**」と。そのきよさにあずからせるとあります。これが私たちに神様がなそうとすることです。きよいものとなる、そのきよさとは何か。キリストそのものです。イエス様のように、神と共に生きる者となる。私たちの肉につける思いがそぎ落とされて、洗い流されて、神様の霊に満たされる者となっていくこと。これが神様のご目的。そして11節に「**すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる**」。確かに、だれ一人訓練を嬉しいものとは思わない。つらいから、苦しいから、痛いから、そんなことはやめてほしいと、人は願います。しかし、それを受けることによって、鍛えられる者に、訓練される者に、平安な義の実を結ばせるようになる。神様の

性質に変えられていく。神様は私たちを愛するゆえに、思いもかけない事柄を起こされるに違いない。その時、私たちを愛する神様は、その愛のゆえに、このことをもって訓練して下さい。私をきよめて下さる。肉の思い、神様から離れる思い、神様のみこころと違う思いを全部、私たちの心からきよめるために、神様はいろいろな手、わざをもって、私たちをきよめて下さるのです。

台風の時節になると、「また台風が来る」と言っていて、嫌がります。しかし台風は、確かに人にとって都合の悪いことがあるかもしれませんが、大自然の営みの中で、これがなければ、自然界はおかしくなってしまう。台風が来ることによって、海の中が攪拌されます。また地上を吹くことによって、木々の様々な余分なものが全部そぎ落とされていきます。時には、それに耐えられないものは倒れて、失われていくでしょうが、しかし、その失われたものは、倒れて何百年か経つうちに、土になり、新しい命を生みます。台風も何もない穏やかな日が続いていけば、何もかも順調にいくかと言うと、必ずしもそうはいかないのです。時に厳しい嵐や、極寒の寒さが、すべてのものを造り変え、新しい命につないでいく力でもあります。私たちもそうです。ここにありますように、「すべての訓練は、当座は、喜ばしいものとは思われず、むしろ悲しいものと思われる。しかし後になれば、それによって鍛えられる者に、平安な義の実を結ばせるようになる」。まことに私たちに対して、神様は何一つ無駄なことをなさる

方ではない。それどころか、患難すらも、試練すらも、神様はご目的をもって、私たちをきよめ、造り変え、新しくキリストの姿かたちにまで変えようとして下さる。主の限りないご愛の御思いをしっかりと受けていきたいと思えます。

初めに戻りますが、「ヤコブの手紙」1章2節に、「わたしの兄弟たちよ。あなたがたが、いろいろな試練に会った場合、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさい」。何か逆説です。何かおかしいのではないか。試練を非常に喜ばしいこと。試練がないことが、非常に喜ばしいのであって、試練を喜ばしい。どうしてそんなことが言えるだろうかと思えますが、それは今申し上げたように、神様が愛をもって、私たちをそこに置いて下さっているからなのです。ある時、この話をしましたら、一人の姉が、集会が終わってから、「先生、今日は良い話を聞かせてもらいましたが、どうも私は納得がいきません」。「非常に喜ばしいことと思いなさいと言われても、思えません。どうすればいいのですか」。「私たちがそれは喜べないと思うからこそ、神様はこう語っておられるのです。喜べないのだったら、喜べないでいいじゃないですか。それをありのままに、神様に申し上げなさい。神様、あなたがこんな試練を、愛をもって与えたとおっしゃいますが、私は堪りません。これを早く除けて下さい。私はいやですと祈ればいいじゃないですか」「いいんでしょうか。喜べと言われてるのに」。私たちが喜べないことを知っているから、神様は喜べと書いてある。私

たちが喜ぶのであれば、こんなことを書かなくていいでしょう。神様がここに書いて下さったのは、あなたが喜ばないことを知っているからです。だったら、正直に、こんな目にあって、喜ばません。しかし、神様はあなたに力を与えて、それが喜ぶように変えて下さる。だから、神様に泣いて訴えなさい。「神様、あなたは私に試練を喜べとおっしゃるけれども、この試練を喜ぶことはできません。これを取り除いて下さい」。その時、神様は試練を喜ぶ力を与えて下さる。そして喜ぶことができるように、変えて下さる。

ヒゼキヤという王様がいます。彼はある時、病気になりました。その時、神様は預言者イザヤを遣わして、ヒゼキヤ王に「あなたの病気は治らない。この病気であなたは死ぬでしょう」。そう言いおいて、帰って行く。ヒゼキヤはショックで、その時、泣いて祈った。それで神様は、帰る途中の預言者に、「もう一度、彼の所へ行け。そしてあなたの命を15年延ばしてあげよう」。その時、神様が預言者に言われたのが、「わたしは彼の涙を見た」。いいですね。神様は私たちの涙を流して祈る祈りを見ていらっしゃる。聞いて下さる。そして、その中から逃れるべき道を備えて下さる。神様は私たちに試練をお与えになりますが、それと同時に、耐えられないような試練ではなく、逃れるべき道をも備えて下さる。その事を通して、本当に試練に遭ったことは良かったと、私たちが試練を非常に喜ばしいことと思えるように変えて下さる。ですから、今日、この言葉を聞いて、「いや、私はち

よっとできんわ」と思われた方は失望しないで、この試練を受けて、それによって、成長させていただくのです。だから、それをむしろ非常に喜ばしいことと思いなさいとある。何よりも、その後にありますように、「**信仰がためされることによって**」、神様は私たちの信仰を訓練して下さる。鍛えて下さる。それは試練の中であらなければ得られません。物事が順調で、思い煩いも、心配もない中に置かれて、そこで信仰がますます深められていくなれば、これほど幸いなことはありませんが、しかし、人は浅はかな者でありますから、物事が順調に行きますと、神様を忘れます。苦しい時の神頼み。何かつらい事、苦しい事があると、神様を求めます。しかし、私はそう思いますが、苦しい時こそ神様を求めるのは、幸いなことです。だから、ぜひ求めていただきたい。苦しい事があり、辛い事があるならば、それだからこそ、主を求めて、自らの信仰、神様を信頼し、イエス・キリストの贖いにあずかった神の子であるという信仰を働かせて、いよいよ深く主につながっていく者になりたい。そういう試練を通して、信仰が鍛えられ、訓練され、より一層力強く、神様を知ることができ、信頼する者と変えられていく。

確かにそう思います。福岡にいらっしゃる方は、五十代半ばだったと思います。肺がんになりました。そして、その結果、右側の肺の三分の二を摘出しました。おそらく手術された時、五年生存率は五分五分という状況でした。彼はその病に侵されるまで、実に好き放題して

おられたのです。ところが、その肺が
んになった時から、真剣に主を求めるよ
うになりました。それから、しばらく、
六十過ぎ、六十二、三位まで、元気に働
きました。その間、彼は一度として礼拝
を休んだことがありませんでした。神様
を第一にしてきました。ところが、そう
でありながらも、自分の若い頃は、いろ
いろな武勇伝がたくさん残っている人物
です。ところが、手術して、死ぬかもし
れないという事態に当たった時、信仰を
振るわれたのです。彼は自分の歩みをも
う一度整えて、なお一層、神様を求め
者になりました。神様はそれに報いて、
それから定年退職するまで、健康を支え
て下さった。ところが、ちょうど定年
になった頃に、喘息を発症し、それで数年
苦しみの中に置かれました。しかし、そ
れでも彼はその中で、神様を求め、御言
に立つ喜びを味わい、神様のご愛の深さ
に常に感謝、喜んでおられたのです。こ
れで神様は本当に恵んで下さると思っ
ていましたが、数年前、またがんが見つ
かったのです。その時も、彼は「主は与え、
主は取りたもう。主の御名はほむべきか
な」、神様がこの病を通して、私を顧み
て下さっていると感謝しました。ところが、
その年の年末近くに、今度は胸にもう一
つがんが見つかる。それは腎臓がんが転
移したのです。とにかく内視鏡で患部だ
けを切り取るという、処置をしてもらっ
たのです。彼はその度ごとに、心と思
いがきよめられていくのです。人に対する
思い、家族に対する思い、自分の人生に
対するあり方、いろいろな事を問われ、
きよめられ、御言によって探られ、光を

与えられ、彼の思いは透き通ったもの
に変わっていく。

いつ、どういう事態がこれから起
ってくるか、もちろんわかりません。しか
し、何があっても、信仰に立つ。神様に
全幅に信頼していく。ただ神様のなさ
るわざに自分を任せる。これは言葉で言
うのはやさしいですが、実際になると大
変です。まさに、訓練が必要です。日々
の小さな具体的な悩み、心配、恐れ、そ
ういう事を通してながら、神様は信仰
を訓練して下さい。何も事がないのは
幸いかもしれませんが、それはある意味
で損な事と言いますか、惜しいことであ
ります。この年も、いろいろな試練に
神様は通されるに違いない。それは恵
みの時です。その時、神様に向かっ
て泣いて祈ろうではありませんか。ま
た、神様からの慰めと力を味わおう
ではありませんか。神様の与えて下さ
る力に支えられていることを実感し
ようではありませんか。これは私
たちにとって、大きな恵みでありま
す。

2 節「わたしの兄弟たちよ。あなたがた
が、いろいろな試練に会った場合、そ
れをむしろ非常に喜ばしいことと思
いなさい」。後になって、本当に、喜
ばしい、あの試練は私の恵みでし
たと言える者になりたいと思いま
す。

ご一緒にお祈りいたしましょう。